わたしのカラダのことで、フェイトちゃんの知らないこ	なのはの肌を焦らすように這っていた舌が、なのはの最
となんてない。	も弱いところを唾液で包むようにかすめた、その瞬間だっ
自身の肌を這うようにつたうフェイトの指先と、耳元で	t.
囁かれるまどろむような甘い声に身をゆだねながら、なの	「フェイト、ちゃ、あ、ん、やあああっ!」
ははふとそんなことを思った。	悲痛とも歓喜ともつかない声と共に、なのはの身体が二、
「ん・・・・あっ」	三度大きく跳ねる。
フェイトの指が、髪が、脚が、舌が、なのはの身体を思	「はふ、はぁ」
うがままに蹂躙していく。	四肢の力が全て抜け落ちてしまったかのような感覚に、
「フェイ、ト、ちゃ」	なのははそのままベッドに崩れ落ちた。
怖い、と思ったことは一度も無かった。	「フェ、イ、ト、ちゃ」
身体の反応するままに、自身の全てをフェイトにゆだね	何度も胸を上下させてなんとか呼吸を整えながら、視線
శ్	を動かして愛しい人の姿を探す。
ときには身体の芯をまっすぐに貫くように、ときにはそ	抱きしめて欲しい。
の肌をふわりと包み込むように。	微笑みかけて欲しい。
「なのはなのは」	だが。
フェイトの声で名前を呼ばれるたびに、なのはは身体だ	「フェイトちゃん?」
けでなく、その心までも愛撫されているような気分になる。	その瞳に映ったのは、自分を見下ろすフェイトの、今に
「や、フェ、だめ、んっ!」	も泣きだしてしまいそうな、まるで親とはぐれてしまった
紅潮した肌と荒い息づかい、抑えようとしても漏れてし	幼い子供のような顔だった。
まうなのはの蕩けるような声が、達するまでもうあとわず	「なのはっ!」
かであることをフェイトに知らせていた。	と、突然なのはに覆い被さるようにして、フェイトはな
「なのはいいよ」	のはの唇に貪りつくように自身の唇を重ねた。
フェイトの指が、なのはの奥深いところに入り込む。	「んんっ!」

フェイトの舌が、なのはの口内にねじこむように押し	「フェイト、ちゃ、や、あ、だ、んっ!」
入ってくる。	まるでなにかにすがりつくように、なのはの身体をフェ
「ん、う、む!」	イトの指先が這い回る。
そうしてフェイトは、まだ力の入らないなのはの身体を	その指使いに、なのはの背筋を悪寒のようなものが走り
抱きかかえ、そのまま唇を喉元から胸元へと這わせ始めた。	抜けていった。
「や、フェ、んっ!」	そう。
先ほどまでとは違う荒々しい舌使いと、それに合わせる	自分の身体のことを、誰よりも、おそらくは自分自身よ
かのようになのはの弱いところばかりを責めてくるフェイ	りも、よく知っている相手。
トの指に、なのはの身体がまた大きく跳ねる。	その相手が、もし本気で、自分の身体を責めてきたとし
「あ、だ、だめ、フェイトちゃ、まって、あ、あああああ	たら。
あっ!」	自分は、いったいどうなってしまうんだろうか。
再度の絶頂。	「なのは!」
内股のあたりに痺れるような感覚を覚えながら、なのは	「や、フェ、フェイト、ちゃん!」
はフェイトの両腕にもたれかかった。	「なのは、なのは、なのはっ!」
「は、あ、んあ」	それから、どれだけの時間が過ぎたのかはわからない。
肺に空気を送り込もうと、なのはが何度も肩を上下させ	何度、達してしまったのかも覚えていない。
3°.	気付けば、もはや指先一つ動かすこともできず、声らし
「ふ、あ、あう?」	い声も発することが出来ないほどに、なのははその身体を
小刻みに震えるなのはの顎を、フェイトは指先でそっと	フェイトに思うがままに責め抜かれ、フェイトの腕の中に
摘んだ。	ぐったりと横たわっていた。
「なのは」	頭の中が朦朧として、今が現実なのか夢の中なのかの区
「えあ、んっ!」	別すらつかない。
そうしてまた、貪るようなキス。	ただ、にじむ視界の向こう側で、フェイトは何故か、涙

を流していた。	なのはが、そこにいるはずの人の姿を求めて、おそるお
「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん」	そる、視線を下に向ける。
何度も何度も謝罪の言葉を繰り返すフェイト。	「あ」
「ごめん、なのは、私は私は」	だが、そこには目にもあざやかなベッドシーツの白が広
段々と薄れていく意識の中で、ただフェイトが最後に発	がっているだけだった。
した言葉だけが、なのはの脳裏に焼き付いていた。	なのはの心臓が、一つ大きく跳ねる。
「私は、もう、なのはをなのはを、愛せない、よ」	「やっぱり、夢、じゃなかった、んだ」
	昨夜、フェイトの腕の中で、今にも消え入りそうな意識
「フェイトちゃん!」	の底に響いてきた言葉。
消えていくフェイトの姿、それにすがりつくように伸ば	『もう、なのはを愛せない』
した手は、しかしフェイトの身体を掴むことはなく、目の	それを最後に。
前には、ただ自室の白い天井が広がっているだけだった。	フェイトは、身動きできないなのはの身体をそっとベッ
「フェイト、ちゃん」	ドに寝かせると、そのままなのはの前から姿を消した。
なのはがゆっくりと身を起こす。	「や、だよ」
夢、だったのだろうか。	なのはの瞳から、涙がこぼれ落ちる。
なのはが小さく頭を振る。	「こんなの、嫌だよ」
「そうそう、だよね」	首がちぎれんばかりの勢いで、なのはは何度も頭を振っ
夢。	た。
きっと夢に違いない。	「嫌だよ、嫌だよ、嫌だよ、嫌だよ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌
フェイトちゃんが、あんなことを言うはずがない。	だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌
目を覚ませば、いつもの朝で。	だあ・・・・・」
見慣れた家具、見慣れたカーテン。そして見慣れたベッ	駄々をこねる子供のように、なのはは何度となく同じ言
ドの隣には、きっといつものように。	葉を繰り返す。